

◎ 連合会だより

第2回の拠点労働者協同組合会議を島根の大田で開きました。第1回で、2回目のテーマを「時代認識を踏まえて、労働者協同組合法を現実課題とし、労働者協同組合としてどんな組織になろうとしているのか、新たな事業・運動の展望をどうえがいているか」と決め、文書を作成し会議を開くことにしました。さすがに、拠点と呼ぶだけあって「労作」が集まり、議論も深みを増してきました。中心は、全組合員経営、ことばを変えれば、組合員一人ひとりが主人公になっていくことです。事務局幹部の成長を起点にその方向を探ろうとしたり、意志の疎通がしやすい組織への改革に着手しようとしたり、既存の各種法人を労働者協同組合ということで整理しようとしたり、それぞれの努力が披瀝されましたが、組合員と本音で議論するその積み上げを何より大事にすることに活動の主眼が置かれているかという点、少しづれを

感じます。本音が「推測」されて、それを事務局が代行し、事務局が活動しやすいように、組織をいじり、したがって活動のポイントを握る事務局の成長を頼みにする、事務局の成長とは労働者協同組合の理念・原則を理解できていることである、という勘違いが潜んでいるのではないか。組合員との本音の議論をつうじて労働者協同組合とは、らしさとは何かということを理解していけるのではないか、組合員は現実に携わっている「仕事」その「経営」がいいのか悪いのか、赤字なのか黒字なのかという実感、実体験をしていること抜きに「推測された本音」では真剣に議論に加わってはこない、実感のないところで労働者協同組合の理念といわれても「絵空事」でしかないと感じるのは当然の話です。この議論の積み上げが労働者協同組合の未来をつくると思います。

鍛谷 宗孝(連合会・専務理事)

◎ センター事業団だより

未だ猛威を振るい続けるO-157。感染経路も充分解明されないまま、学校給食が再開されるという。春先大きな話題となった病院給食を巡る一部企業と協会の独占・癒着問題が、今回の学校給食でも見え隠れする。薬害エイズ問題も、川田龍平君が強調した「刑事事件」として逮捕者が出た。そして今日、戦後50年を経てはじめて沖縄の人々が直接「米軍基地問題」に意志表示する県民投票が行われた。自治体集中行動のこの時期に、くしくも「公共性」が問われる出来事が頻発している。先日の所長会議でも北九州事業所の滝沢所長が「病院に向かって非営利という理念を説けば、反応が非常に高く、3件の見積提案することとなった」と報告していた。トップセミナーで講演いただいた山際完治先生の「労協が行政委託を求める社会的意味」を、ますます実感し深めねばならないし、これを事業の中で証明していく勝負が、常に自覚されていくよう、組織を強く動機づけなければ、と気がはやる。

ふと「人生とは何だろう」という思いにかられる初秋。事業所活動における、経営体としての営みを1ヶ月単位でまとめやりきる運動を提起している今、「節」をどのように自覚し、つくりだし、次へのエネルギーに出来るのかという事は、一人一人の人生にとっても実は、重要な分岐点であり難しさのように思う。人は時々の行為や思いを自らに納得させベストだと思い、時には自らに言い聞かせる。しかし他人から見て、必ずしもそれは一致する訳ではない。だからこそ、「節」を持つことを意識し、自らの心音を他人に伝える作業抜きには、自らの人生の価値を他者とも共有し得ないし、事業所活動においても同様なのではないか。ここに邪な思いや正直さを欠いたとき、営みにおける充実や真実は遠ざかるように思う。秋の訪れと共に人恋しくなる秋。いっそ思い切り「人欲の秋」と決め込み、アクティブな季節にしたいと願う。東京高齢協設立を最大の「節目」として。

古村 伸宏(センター事業団・事務局長)